

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 桐生裕子

桐生裕子「近代ボヘミアにおける農村社会の変容——19世紀後半における農村住民・市民・国民をめぐる」は、1848/49年革命期から20世紀初頭を対象として、ボヘミア社会が身分制的な構造から市民社会的な構造へ転換する過程で、その農村が経験した変容を明らかにすると同時に、身分制廃止後の農村住民の隷農から市民への変化という具体的な経緯を分析し、ボヘミア農村における「国民化」の問題について考察した本格的な論文である。

19世紀後半期のボヘミアは、ハプスブルク帝国のなかでは、経済的に最も先進的な地域に成長するため、わが国のこれまでのチェコ近代史研究においては、プラハの産業化や都市の問題に焦点が当てられる傾向が強かった。こうした傾向に対して、本論文は隷農制廃止後のボヘミア農村で普及し始める雑誌と結社、それに基づく社会的コミュニケーション網の緊密化といった側面に注目し、チェコ語の史料や文献を駆使して考察を進めている。

分析に際しては、実体としてではなく、あらたな主体として国家や社会の運営に参画してゆこうとする人びとの政治的・社会的・文化的な実践のあり方を捉える概念として、「公共圏」を用いて次の二点を明らかにする試みがなされる。第一は、雑誌や結社を基盤として「公共圏」が構築されてゆくなかで、身分制社会の基礎となっていた従来の閉鎖的な地域社会が、いかに解体・再編され、身分的に解放された農村住民が新たな政治主体として、ハプスブルク帝国やボヘミア社会の運営にかかわる議論にどのように関与していったのか、という点である。第二点は、こうした過程で、国民という新たな社会の編成原理がどのような機能を果たしたのかということである。これら二点を明らかにすることにより、ボヘミア農村における「国民化」の問題について検討が加えられている。

本論文は序章、本論の三部6章、そして終章から構成されており、A4用紙で脚注を含めて270ページ、図表・地図が16ページ、参考文献表が15ページからなる力作である。基本的には、通時的な流れに沿って展開されている。

序章では、本論文の課題を提示した上で、この課題と関連する研究史が、①農村史研究、②ボヘミア史研究、③ハプスブルク帝国史研究の三点にわたって、詳細かつ手際よくまとめられている。チェコ語文献に加えて、ドイツ語圏や英語圏の研究を整理したこの研究史は貴重な貢献であり、ここから、本論文の位置づけがはっきりと読み取れる。本論文で「公共圏」や「市民社会」という分析概念を用いる理由も説明されており、こうした概念を用いることによって、従来の言語的・文化的に均質な「民族集団の覚醒」として「国民化」を捉えるのではなく、既存の社会秩序を再編してゆく複雑な権力関係の再編過程として捉

えることが明示される。

第一部は2章から構成され、本論文の導入部にあたる。ここでは、1848/49年革命における隷農制の廃止が農村社会にとって、どのような意義を持ったかが示されるとともに、19世紀後半におけるボヘミア農村社会に変容の基礎となる条件が検討される。第一章では、隷農制下の農村社会について概観し、隷農制廃止の経緯とその後の農村社会に与えられた制度的・社会的条件が整理されている。

第二章では、19世紀後半期の農村社会における出版物や結社の普及の前提となる条件を確認するため、それ以前の時期の農村住民のあいだの議論や農村住民に対する啓蒙活動が、主としてハプスブルク帝国権力やチェコ系国民主義者に注目して検討されている。

第二部は2章から構成されており、ここでは、1850年代から60年代を対象として、ボヘミア農村における雑誌の普及と結社活動の展開が具体的に考察される。第三章では、ボヘミア王国農業協会が発行したチェコ語の雑誌『農事新聞』を取り上げ、その読者と言論空間が検討される。ボヘミア農村における出版物の普及状態の一端が示されるとともに、農民の市民、さらに国民への育成を目指す啓蒙活動を通じて、農村住民の社会的・文化的な実践がどのように変化したかが明らかにされている。

第四章では、ボヘミア王国農業協会を取り上げ、設立の経緯活動について検討される。農業協会という新たな原則や規範に基づく結社的な結合が、どのように新たな「公共的」な議論の空間を生み出して、地域社会を再編することになったか、その過程で国民という社会の編成原理がどのように地域社会に持ち込まれることになったのか、という問題を明らかにする試みがなされている。

第三部も2章から構成され、1870年代から20世紀初頭にかけての農業結社と農村社会が考察の対象とされる。第五章は1870年代から90年代にかけての農村社会における結社活動の展開が検討される。この時代は、いわゆる農業運動が展開された時期であり、従来の研究では、それが主に経済史的な視点あるいは政治史的な視点からなされてきたが、ここでは農村社会への結社活動の浸透、農村社会における「公共圏」の拡張、農村社会と領邦・帝国レベルの政治との関係といった視点から、捉えなおす試みが行なわれる。

第六章では、19世紀から20世紀初めの時期を対象として、農業結社を基盤とするボヘミア王国農業審議会チェコ・セクションが、農業労働者の問題にどのように取り組み、農村社会の富裕層が下層民と取り結ぶ農業雇用関係をどのように再編しようとしたのかについて検討される。

終章では、近代のチェコ国民が農村住民とその文化を核として形成されたという従来の「民族再生論」が批判され、ボヘミア農村住民の「国民化」は身分制廃止後に進行する社会の編成原理の転換の過程として、市民化と市民的な規範の受容を伴いながら進化したと結論付けられている。

本論文の研究上の貢献としては次の2点が指摘できる。第一に、ヨーロッパにおけるナショナリズム研究や国民(ネイション)研究は、西欧と東欧といった二分法に依拠してなされ

る傾向が強かった。西欧の「合理的・自発的国民」あるいは「市民的国民」と東欧の「非合理的・有機的国民」あるいは「民族的国民」に区分し、東欧の国民の「遅れ」を指摘して、西欧の国民を称揚するという議論である。しかし、本論文が実証的に明らかにしたように、ボヘミア農村の「国民化」は市民化を伴って進行したのであり、国民を単純に東西に二分することはできない。ボヘミアの農村社会を事例として、この点を解明したことは大きな貢献であり、ヨーロッパの国民研究にも大いに寄与する研究といえる。

第二は、本論文はわが国のチェコ近代史研究において、農村に注目した初めての研究である。チェコにおいては、農村史研究はもっぱら経済史や政治史の視点から行なわれてきたが、この論文は社会史の視点を取り入れている。また、ボヘミアで発行された雑誌を史料として駆使しているだけでなく、現在のチェコ歴史研究において、あまり参照されることのない戦間期の農村研究の文献を掘り起こし利用しており、この点は高く評価される。本論文は、今後のチェコ近代史研究にとって、一つの方向を提示しており、基本的な研究として長く参照されることはまちがいない。

上記のように、本論文はきわめて高く評価することができるが、問題点がないわけではない。審査会では、①農村社会の分析を19世紀以前の時期にまでさかのぼって、もう少し長いスパンで考察する必要がある。②史料上の限界があり、農民を啓蒙する目的の雑誌が主たる史料として使われているので、議論が図式的になる面が見られる。③「公共圏」という分析概念が十分に生かしきれていない。④史料の読み込みが必ずしも十分ではない、さらに突き詰めた分析をすべきである。⑤序章の問題提起、それを受けての終章でのまとめと本論文の課題については整合的に書かれているが、本論とのつながりが十分に論じられているとはいえない。以上のような本論文の問題点と今後の課題を含めた指摘がなされた。

しかし、審査委員会は指摘された問題点が本論文の学術的な価値を損なうものではなく、本論文が博士論文としての水準を十分に超えていると判断した。したがって、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。